

内藤辰美教授と私の社会福祉学科での研究

—内藤辰美先生退職記念号に寄せて—

石川 隆代

内藤辰美先生には、学部のゼミの頃から博士課程前期までをご指導頂いた。卒業論文のテーマを選択したのも現在の研究も、先生のゼミで読んだ『職工事情』に端緒を発する。当時は女工という言葉すら知らなかった私が、明治時代の紡績工場における労働問題に関心をもった事から、卒業論文としてとりあげようと考えたのである。その頃は内藤辰美先生がゼミの中で指示される文献等に関しても、また「コミュニティ」に関しても殆ど知識も関心も無かった為、時には絶版になった本や、また非常に古典的なものまであり、まず手に入れる事から苦勞した事を覚えている。『職工事情』についてもその本の本当の重要な位置付けを理解していた訳ではなく（それは後に社会調査として重要な文献であったと気づくのであるが）その中で出てくる労働問題の当時の悲惨さや、社会事業をひとつのテーマとして取り上げようと考えただけであった。私が研究対象としたのは倉敷紡績という極めて息の長い企業で、大原孫三郎という企業家によって、様々な先駆的社会事業が為されていたこと、また児童福祉分野において有名な石井十次の岡山孤児院の強力な支援者であったことが目を向けた理由である。卒業論文では、とにかく大原孫三郎の社会事業についてまとめたといった物で極めて稚拙であったが、内藤辰美先生はそれについては厳しい指導はなされず、むしろ様々な文献などを示して下さい、研究を続ける事の大切さを述べて下さった。博士課程前期でも企業の社会貢献という点をテーマとして、倉敷紡績

を引き続き対象としたのであるが、倉敷紡績の社史を編纂なさった方との出会いや、倉敷商工会議所、また大原謙一郎氏などのご協力が得られた事で豊富な資料を得る事が可能となった。しかし、その膨大な資料と向き合い始めて自らのこれまでの研究の姿勢の在り方を大きく変えなければどうしようも無いという事にも改めて気付かされた。倉敷紡績という一地方都市における企業の社会事業について研究するという事は、まず、明治維新という歴史に対するきちんとした知識と、産業革命という日本の産業構造の大きな転換と倉敷という地域との相互関連を考えなくてはならないという事であり、また、同時に農村社会学などの地主-小作関係の先行研究を学ばなければならない、その上で大原孫三郎という人物の社会事業を紐解いていかなければその意味を理解することが不可能であろうと認識させられたのである。その作業は時には経済学分野や社会福祉学、社会学など様々な分野と関連しながら日本全体の構造変化について学ぶと同時に、倉敷の地域の歴史資料やひとつひとつの社会事業に関連する膨大な資料に向き合うといった作業の繰り返しで、とても手に負えるものではないのではないかと、研究としてまとめるだけの力には自分には無いのではと焦りと不安ばかりの毎日であった。内藤辰美先生のその間のご指導といっても、細かく厳しい意見などは殆ど無く、それは私の方からも自身の自信の無さに起因する事であったのだが、こまめに内容を見て頂く事はなかったし、むしろ最大限の自由を許し

て下さったように思う。ただ、非常に印象的なのは、不思議と自分が行き詰っていたり、不安になったりしている時に極めて適切な助言が頂けたことであった。適切な時期に適切な助言をして頂けるという事が、研究を続ける上で如何に心強いものか、また適切な時期という事では、私が先生に何か指導を求めていったという訳では無いにも関わらず、研究のポイントのずれや行き詰りを察知して下さるといふ点で、今改めて内藤辰美先生の長い経験と学識の深さというものに対して深い畏敬の念を抱かずにはいられないのである。

研究にあたっては日本産業革命研究史を概観するという作業が必要であったがこれには膨大な研究がこれまでなされており、その全部を網羅することはもちろん出来なかった。しかし、大石嘉一郎編『日本産業革命の研究』上下2巻は日本産業革命を集約する重要な文献として参考となった。また、同時に岡山県での当時の民衆史や経済、倉敷紡績について詳しく調べる事が出来たのは、倉敷紡績社史を編纂された大津寄勝典氏の多大な協力によるものと感謝している。また、産業革命と地域を明確に体现しているアメリカにおける研究については内藤辰美先生が、主要な研究の文献を紹介して下さいました。また、都市研究の基礎となるシカゴ学派の研究の中でも、都市全体の中でのひとつの社会集団の規範形成や生活の在り方をより探究する点としてホワイトの「ストリート・コーナーソサエティ」は都市を可視化出来る部分のみで理解せず、生活の単位からの理解を研究する視野の大切さを私に与えてくれたといえるし、また、リンズの「ミドルタウン」は1つの町の変化を細かく調査するといった点で今でも折にふれ読み直している文献の一つである。それらの文献を読み、倉敷紡績の社会事業を分析していく作業の中で、自分の中でもっと深く追求していくべきであるの

は、「コミュニティ」なのではないか、そこにもっと大切な様々な要素があるのではないかと、という問題提起が喚起されてきた。具体的に述べれば、倉敷紡績の社会事業の幅広さや先駆性は突然大原孫三郎の出現によって、生まれたものではなく、倉敷紡績設立そのものが倉敷地域の今後を考えた3人の青年たちによって成された事、大原孫三郎の社会事業を成立させたのは、地域の人材のネットワークが機能した事などが解ってきたからである。現在では「資源」という言葉が頻繁に使われるが、倉敷には社会事業に関わる「資源」が、天領時代から存在し機能していたのである。天領の時代に倉敷はすでに民主的政治意識を持ち、地域改革に着手していた。その民主的思想を持つ人々については現在も倉敷の人たちは「クラシキ者」と言った言い方で現すが、その言い方にも様々な当て字を用いており、「封建的な束縛から離脱し民権の伸長や近代産業の移植に寄与した者」については「倉敷者」という当て字を使用し、「新しい文化や都市計画まで手を広げる人」については「倉子城者」と表現して明確に区別している。大原孫三郎については後者に属するのであろうが、そのような民主制、自治精神が何を基盤としたのか、地域の基盤や文化、風土に着目する事が必要であろう。倉敷が天領であった事はひとつの重要な要素と考えられるが、他の天領であった地域との比較研究を行っていない以上、それについては明確な答えを出すに至る事は出来ない。もうひとつコミュニティが重要と考えたのは、大原孫三郎の述懐した「私は倉敷に執着しすぎた」といった言葉であった。大原孫三郎の社会事業に対する熱意と思想には、キリスト教徒でありながらも、儒学、報徳思想などの複雑な混在があり、単純に理解することは不可能である。しかし、「郷土愛」と「徳」については一貫しており、その結果として地域に最も良いものを持ってきた

い、郷土を良くする目的ならばやる、それは文化都市がなぜ地方にあってはいけないのか、と常に述べていた点、また前述の報徳思想の現れとして、企業家でありながらも農業技術の発展面においては、むしろ地主としての報徳としての責任を自己に課していた事からも推察できる。個々の社会事業の評価は後世でなされたものであって、多くの研究では企業家としてまたキリスト教精神の部分が評価されているが、倉敷という一つの地方の地域活性化に取り組むという「コミュニティ」からの視点に置き換えれば、その社会事業思想に様々な要素が含まれ、あらゆる思想が取り込まれ混在していても郷土を活性化したい気持ちの発露であったと理解できるのである。そのような取り組みは現代の地方のいわゆる町おこしや活性化事業、一村一品運動などと共通するものがあるのではないだろうか。

日本はいわゆる上からの地域経済発展計画によって地域の本来にあるべき姿は常に置き去りにされてきた。倉敷もまた例外ではなく、天領の頃より自治的に推進されてきた自発的な町づくりが、様々な制度の整備や上からの開発計画によって中断されたとも言える時期があった。倉敷紡績と町の住民自身が行った自主的な町整備事業や大原美術館、美観地区は倉敷の観光都市としての位置づけを明確にし、「ほっておいても観光客の来る町」になった。しかし、その時期が市民の自治意識を低下させたこともまた事実であった。経済構造の変化によって倉敷紡績も大阪に移り、リーダーであった大原家もまた活動は東京、大阪と経済の中心にその基盤を置かざるを得なかったことで、倉敷は一見観光都市としての成功を為し得ているように見えながらも、東京を中心とした日本の経済構造の中に埋め込まれてしまったのである。行政サービスの拡大という専門処理依存が、

倉敷の長い自治の歴史を後退させ地域の自立性と国家との関わりという課題にしっかりと向き合う事が出来ないまま、その帰結として現在、問題とされている地方の格差構造が生じた。本来ミクロな地域の視点、生活者の単位までどうなるのかと云った議論は地域でしか出来ないのではないだろうか。コミュニティに最適なシステム作りは地域を知る住民の側から本来提起されるべきであろう。倉敷進を代表とする都市類型分析研究でも明らかにされているように都市の性格や住民意識はその成立基盤がどうであったかによって各々異なる。現在の地域コミュニティを考える上で歴史という軸はその地域の住民の意識構造や相互ネットワークの成立の重要な要素である。近年の市町村合併の活発化により、倉敷地域も地域の合併による地域の再編成は進んでいるが、そのような行政による区分とは別に地域住民がもつ地域に対する帰属意識の範囲や風土にたいする愛着といった範囲が同様とは限らない。倉敷に限っていえば、昭和29年に設立された「高梁川流域連盟」に代表されるように一つの川の流域全体に対する恵み、川がつなく地域共同体意識も住民は常に持ち続けている。倉敷は一時期の専門処理依存の時期を経て、新たな課題に現在向き合っている。ひとつは世代交代から観光の中心ともいえる「美観地区」の商店主などが殆ど地域外からの通勤という形態に変化し、居住者の不在による地域への帰属意識の低下しつつあるという問題、そして「美観地区」から続く天領時代の古い町並みを残す町屋の通りの高齢化による後継者不在、空家、空き地の増加という問題である。このような問題は地域の経済問題と同時に地域の防災、相互扶助等の地域福祉に関わってくるものであり、町内会や自治会、子供会等の存続すら危ぶまれている。社会変動の波は他の地方都市と同様に倉敷においても様々な形で顕在化している。その変動の方向に対して新しい

21世紀型のコミュニティの展望というものが必要となるだろう。国際化、情報化、環境、経済、そして高齢化といった構造の変化がこれからのコミュニティを考えていく上での重要なファクターであろう。倉敷地域において言えば、高齢化という課題が、第一のファクターといえる。しかしその課題に対して新しい取り組みが生まれつつある。一早くその事に対し認識を共有したのは、「町衆」という古い町並みに居住する伝統的な精神をその精神的基盤として受け継いでいる人たちであった。「町衆」というと保守的で排他的なイメージを抱きがちであるが、天領の頃から大原孫三郎が主導的立場として倉敷の町づくりに取り組み、ネットワーク作りを行った自治的精神や倉敷という郷土に対して良いものなら受け入れる、支援するといった精神は倉敷の人々に受け継がれており、大原孫三郎が倉敷のためならと地域を超えた人的・社会的資源のネットワークをあまねく活用したように、倉敷の新しい地域活性化への取り組みは「住民概念」についてもその意識の根本には倉敷に愛着を持つ人々のネットワークというのが想定されており、決して排他的なものではない。地域福祉の基盤ともいえるコミュニティの相互扶助的ネットワークを考えた時に、これからは高齢者の多い地域住民だけでは解決できない事が多く、また行政などの画一的なシステムには対応できない部分も多い。現在の倉敷のまちづくりに取り組み始めた人たちは、時代の流れと達観せず自主的に、そのような課題を地域を超えたネットワーク作りによってひとつひとつ解決して行こうとしている。行政区分による地域ではなく、倉敷に恵みをもたらしてきた高梁川を中心として地域をデザインし固有文化とネットワークを再生させようという試みでもあり、それは「この地」という個のアイデンティティを蘇らせるという取り組みである。

人々は何かの課題に向かわざるを得なくなった時に、あらゆる周囲の資源を活用し対応しようとする。どの資源に重きを置くのか、誰にとって価値があるものなのか、どの資源がどの領域まで有効なのか、資源というものは固定的なものではなく、活用する側如何によって様々に転換しうるのである。限定された外から、または行政から見て価値があるだろう、有効であろうと考える資源やシステムの価値観は、住民にとって同じ様には機能しないし、資源の有用性も地域住民の構造やスタイルは何に強く影響を受けているのかを前提にしなければならないのである。倉敷の町づくりを担う人々は「郷土」という価値に重きを置いて、そのアイデンティティが郷土に育まれるものであるという認識を共有し、それをこれからの町づくりの中心としようとしている。地域への愛着や共同体といった古く感じられる言葉は、血縁や地縁を抜きにして考えれば以外に資源として転換しやすいものなのであると考えているのである。具体的に述べれば、倉敷の住民が「倉敷が好きである、住んでみたい」と思う、または祖先が倉敷にいたが、すでに家などもなく縁故も無いといった人のために、高齢化によって空家となった、家の歴史をひも解き住民相互の努力で再生し、「住んでみる」という体験のできる場を増やしていく努力を重ねている。「居住」する事で地域への関心の強まりを強固にする、また若者参加という地域振興の方法的課題についても居住体験をし、人的ネットワークを増やすことで人々の高齢化した地域生活を支えようとする試みである。一方では観光都市であるという事で通過型の観光客に対する事業も展開しながら、観光ではなく「居住」にも焦点を当てるといような資源活用の方法は住民独自の発想であり、主体的なものである。大阪で事業を展開している倉敷紡績もまた、倉敷市民をいまだステークホルダーとして常に意識しており、倉

敷に保有する土地の利用に関しても、倉敷の住民のために良いような活用を任せるといった姿勢を取り続けている。領域を超えてつながるといった発想は、振り返ってみれば、倉敷紡績設立以前から倉敷商人が町を活性化する方法のひとつとして常に取り組んでいた。現在の倉敷の町づくりについても、領域を超えたネットワーク構想という点で、倉敷という地域の住民に精神構造としてその底流に流れている基盤とは何かという事を考えながら研究を進めていかなければならないと強く感じるのである。内藤辰美先生は常々「地域への愛情を住民が持たなくなったら地域は疲弊する」と言っておられたが、その言葉の重みを自分が一つの地域を長く観察することで実感している。内藤辰美先生は山形大学での研究、また現在の小樽市の研究など常に地方都市のコミュニティ研究の大切さをご自分の研究を通して私に教えてくださった。私は以前「冬の寒い時期に小樽市での研究に行かれるとは大変ですね」と言った質問をしたことがあったが、考えてみれば、その地域が置かれるもっとも厳しい環境の時に行かなければ本当の生活など解ることは出来ない。そのような愚問を發した自分がコミュニティについて研究しようとしていたのは恥ずかしい限りであった。

内藤辰美先生はその著書「市民文化と地方都市自立的地方社会の可能性」恒星社厚生閣、において一地方都市の市民の「意識」の「調査」にかかわるのは意識調査が「事態のより良き改善」とそれに向けて「問題の提起」に一定の機能を果たすことができると考えるためである、と述べられているが、私もまた一地方の倉敷という都市の変化をなぜこのようにいつまでも見続けるのかと問われれば、そこで生活している人々自身の「事態のより良き改善」という努力があるからであるといえる。コミュニティの福祉とは生活者自身がより

良く改善していこうという取組みの連続に他ならない。マクロな行政側の条件整備や、福祉政策などは絶対不可欠なものであるし、大規模な調査による分類や研究もまた、地域の傾向を知る上でも必要かつ有効な研究である。その事を常に意識しながら、それらがより生活者の立場に近づくためには、生活の単位である小さなコミュニティが長い時間をかけてどのように地域の「より善き改善」に取り組んできたのか、その構造を紐解いていくことも、福祉研究の一つであると考え、私自身はこれまでも、またこれからも続けていけることを望んでいる。これまで、倉敷の方々にも多大なご協力を頂いたが、続けていくという事のみでしか、そのご恩をお返しできないという気持ちもあり、研究を続けている。また内藤辰美先生や、福祉学科の先生方の研究に対する姿勢を見る度に、自分の研究において依拠する場所はどこなのかを考える事ができ、研究の奥深さや続ける事の大切さを認識させられた。そのような気付きは、日本女子大学の社会福祉学科に身を置くことが出来たという偶然で得られたことを思えば、改めてその機会を得られた事に感謝をする日々である。私事ではあるが、倉敷を研究している事で、日本女子大学に籍を置いて良かったと感じる出来事が多い。倉敷と日本女子大学は深い関係があり、倉敷紡績が女工の寄宿舎の指導者として初めて雇用した女性達は日本女子大学卒業生であり、倉敷の美観地区にある旧大橋家出身の大橋広は日本女子大学の学長を勤めた。そのようなつながりもあり、倉敷の方々には非常に好意的に協力して頂いた。改めて日本女子大の歴史と先輩方の社会貢献には驚きと感動を覚えている。在籍中もその後も助手の方々には、院生の一人一人の研究を常に気にかけて下さり、十分感謝の意を伝えることが出来ないままであったが、この場で改めて感謝申し上げたいと思う。そのような暖かな環境の中で研究できたこ

とが、いかに得がたい体験であったのかは離れて後に折に触れ、実感していることである。研究の上では能力的にも時間的にも出来ない事の方が多いのでも十分理解している。しかし、これまで関わって下さった方の励ましや、ご協力に出来るだけ誠実に向き合っていきたいという感情から、これからも倉敷という一地方を研究しながら、社会の良き改善とは何かを私も問い続けたいと思う。

参考文献

- 犬丸義一著(1998)『職工事情』上下巻 岩波文庫
R・S・リンド, H・M・リンド著 中村八朗訳(1990)
『ミッドウルタウン』青木書店
W・F・ホワイト著 奥田道訳(2000)『ストリート
コーナーソサエティ』有斐閣
内藤辰美著(2001)『市民文化と地方都市 自立的
地方社会の可能性』恒星社厚生閣